広島大学教育学部紀要　第2部　第39号　1991.2.26

展望的地理言語学序説

—老・少年層言語地図の対照研究法が提起することについて—

江　端　義　夫

(1990年9月11日受理)

A Progressive Geographical-Linguistic Study
——on the comparative method between the aged and youth group——

Yoshio Ebata

Through the contrast between the aged and youth group of the Linguistic maps, the important 4 movements are found as follows.

1. $X \rightarrow \phi$ (disappearance)
2. $X \rightarrow X^n$ (extension)
3. $X \rightarrow Y$ (alternation)
4. $X \rightarrow X'$ (maintenance)

はじめに

手もとに若干の言語地図がある。それらを見ると，老年層を中心とした方言地図ばかりである。

○Kolb, Eduard : *Linguistic atlas of England.* Vol.1, 1966

○Harold Orton and Nathalia Wright : *A Word geography of England.* 1974.

○Séguy, Jean : *Atlas Linguistique et ethnographique de la Gascogne.* Vol.1, 1954.

○Werner H.Veith , Wolfgang Putschke : *Kleiner Deutscher Sprachatlas* 1,1984.

○Mario Alinei, A Weijnen : *ATLAS LINGUARUM EUROPAE* Vol.1-3,1988.

地理言語学の伝統に立てば，それは，歴史言語学の一方法であるのだから，現在の言語現実から逆史的に歴史を再構することは，当然のこととされているのであろう。A．メイエは『史的言語学における比較の方法』の中で，地理言語学の方法と価値に多くの紙数を費やし，「言語地理学は各々の語，各々の形のもつ歴史が，それぞれ特異性をもつことを特に明らかにした点において功績があった」としてもいる。この思想はそのまま日本に招来され，服部四郎氏は，「比較方法」(『言語の系統と歴史』1971）の冒頭で，

「比較方法は言語史を構成するための基礎的方法である。同系語あるいは方言を比較することによって祖語を再構し，その祖語よりそれらの諸言語・諸方言への変遷を説明しようとする比較言語学が，この方法を主軸とすることは言うまでもないが，言語史のいろいろな面を明らかにする他の諸方法，すなわち過去の文献の研究，言語地理学，言語年代学，内的再構も，やはり比較方法をその基礎としていると言うことができる。」

と述べておられる。それを受けて，柴田武先生は具体的に，比較方法のちがいを，

「言語地理学は言語史の方法の一つである。したがって，言語地理学の目的は言語の歴史を明らかにすることにある。(中略)

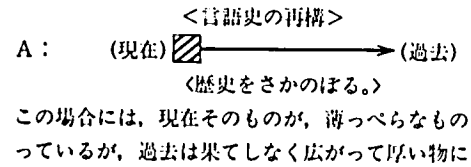
比較言語学が構成する言語史は，諸言語間の大まかな分裂関係である。言語地理学は，できるだけ細かい段階に分けての分裂と統合の関係を構成しようとする。」

のように述べておられる。

さらに小林隆氏は，言語史の観点を一層深めて，文献国語史と言語地図とを照合することにより，位相論的語史の再構に，明るい道をつけられた。(参考文献⑤)

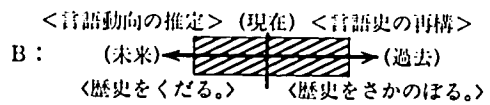
※　※　※　※　※

しかし，以上の地理言語学的研究は，現在から過去へさかのぼることが専らの手だてとされている。いわば，逆史を通して，語の展開過程をたどろうとするものである。それは，次のようにモデル化される。



この場合には，現在そのものが，薄っぺらなものとなっているが，過去は果てしなく広がって厚い物になっている。地理言語学が歴史言語学（言語史研究）の一つであるという常識から，現代への視点が，「点」に凝縮されてしまったのであろう。ところで，現代の方言についてさえ，現代史の見方ができていたならば，点でなく，「過程」（プロセス）として把えることがありえたのではないだろうか。

老年層の言語地図と少年層の言語地図とを作って比較してみよう。そこには，すでに，方言の現代史が描かれているはずである。複数の言語地図の分布を比べてみると「方言の将来」が，見えて来よう。方言が現在どのように意識化され，どのように伝播し，どのように変遷していこうとしているかを示してくれている。複数の言語地図の比較によって，方言の現代史を見はるかすことができ，今後の方言状況を推定することが可能である。即ち展望的な言語史，未来推定の言語史，方言動向の言語史，展開の言語史が醸成されるであろう。



以上のように，AとBとを比べてみれば，従来の伝統的な方法が，いかに不十分なものであるかが知られよう。筆者は，老・少の言語地図を比較して研究する地理言語学の方法には，従来の伝統的な地理言語学では想像もできなかった進展的な言語史が明らかにされることがあるという点に注目したいと思う。特徴を強調すれば，

A＝老年層だけの言語地図によるもの。
B＝老・少の言語地図などを比較するもの。

A＝言語史再構の地理言語学
B＝言語史展望の地理言語学

とでも言えそうな特色がある。

ただし，これは，筆者の独創によるものではない。この研究方法のご示唆は，藤原与一先生に与えていただいたものであるように思う。

すでに早く，藤原与一先生には，大著『瀬戸内海言語図巻』(1974年）があり，老年層と少年層とを一対と見るすぐれた先駆的労作がある。その上巻の「読図案内」には，「いつも，老年層図と少年層図とを比較して，現象の推移を観察して下さい」とある。また，『瀬戸内海域方言の方言地理学的研究』(1976年）には，上下2巻の言語地図の分布について，老・少を比較して言いうる最小限度の節度ある言葉で，言語分布と言語史が端的に記述されている。筆者は藤原与一先生のご認識の延長線上で，独自に仕事をなし，以上のような発想を展開したのであった。

※　※　※　※　※

さて，言語地図は，語ごとに分布が異なると言われている。となれば，老・少年層を比較すれば，同じように，項目ごとに年層間の分布様相は異なると考えられるだろう。

たしかに，全く同じ分布様相を示すような言語地図は存在しなかつた。しかし，それらを見渡していくと，地域ごとに，言語への好みの相違によるのか，はっきりした理由は言えないが，老・少年層間での分布の変容について，一定の傾向がありそうなことが分かってくる。

そこで，特定の地域では，どのような語が衰退しようとし，どのような語が拡大しようとしているのか，それが，どうして少年層で受け入れられなくなっていくのか，などを事実として確認することにしたい。

かつて筆者は，拙論「瀬戸内海域言語地図の老年層図と少年層図を見くらべて」(『方言研究年報』14巻，1971年）において，方言の分布領域×方言分布量で考えて，5つの類型を提示したことがあった。その考え方は正当だと思うが，以下の記述では，それを練り直して，4つの型を提案してみたい。

①老年層での分布が少年層で極端に衰滅していく傾向。
　<衰滅型>　「すみませんナモ」
②老年層で少なかった分布が少年層で極めて隆盛になっていく傾向。
　<拡大型>　「小鳥も昔は沢山いたっケ」
③老年層での分布が少年層で，著しく変換する傾向。
　<変換型>　「鏡の［ŋ］」
　　「曾孫のヒーマゴ」
④老年層と少年層とで分布に動きが殆ど見られない傾向。
　<静止型>　「こっちへオイデン」
　　「さげる（二人で持つ）のズル」

以下では，これらを，具体的な言語地図に照らして考察してゆきたい。

1.≪衰減型≫への展開が認められる老・少言語地図

(1)「すみませんナモ」(老年層)・(少年層)

老年層では，たとえば，次のように「ナモ」が行われている。

○イッツカ　ワスレテマッテ　ミエル　ワテモ。

とっくに忘れてしまっておられるよねえ。(老女→筆者) 名古屋市中川区中郷町，1967

この「ナモ」という方言事象は，愛知県の尾張地方の老年層の間で，敬意度の高いもの言いとして存していることは，図1によって知られる。しかし，図2の少年層では，尾張の北部と南部の2地点に，残存するばかりで，「ナモ」は，全く衰滅寸前の状況にある。

図1において，尾張地方で「ナモ」があるのに，三河地方にそれが存しないのは，「ナモ」の代わりに「ノン」や「ナン」などを使うからである。三河では「モシ」と呼びかけるもの言いに馴じまない現状があった。その点が，三河地方の図1・2と同じありさまである。

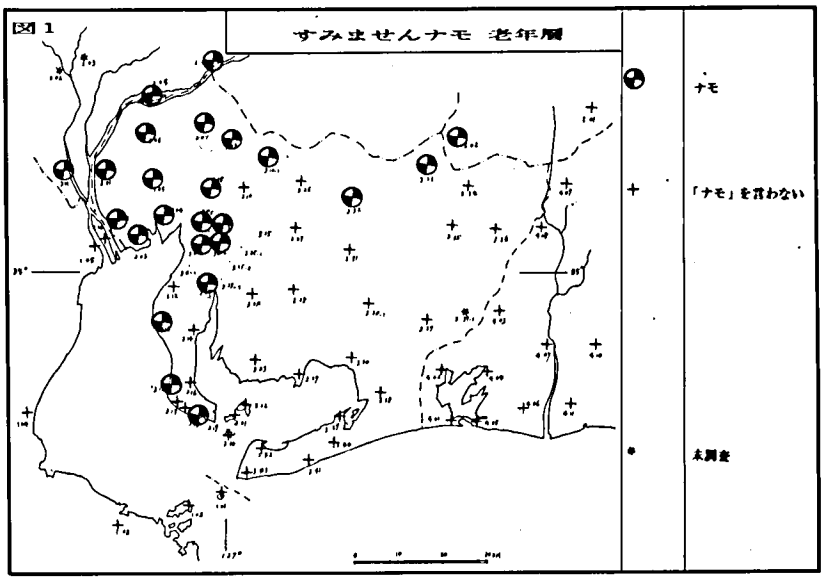
しかし，図2において，なぜ老年層でよく使われていた「ナモ」が，少年層で使われなくなったのであろうか。その理由として，以下の三点が考えられる。

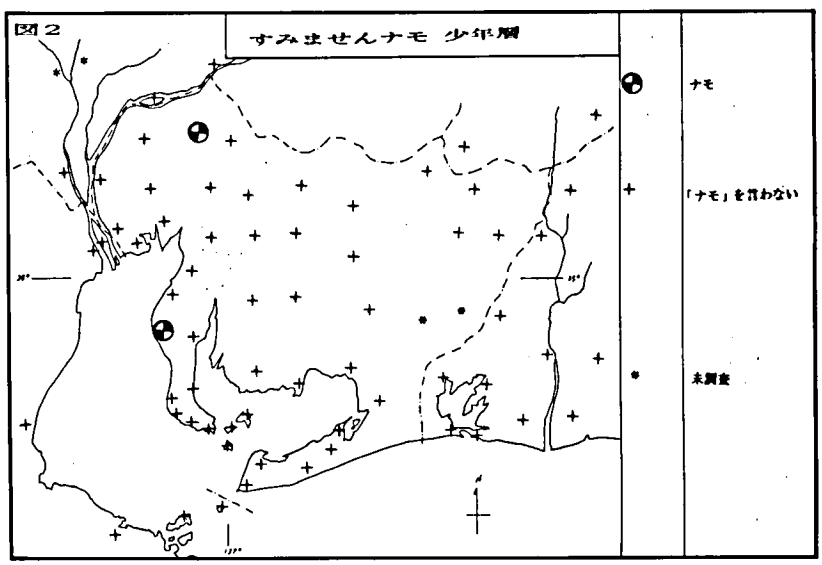
①「ナモ」は敬意度の高い丁寧語だが，子供たちからは，濃厚な人間関係でそれを使う経験を持つ前に，拒否反応が示されたようである。

②「ナモ」は，もはや"古くさい"言葉になりさがってしまった。尾張地方の北のはずれと南のはずれ(図2)とに有るだけである。少年者が魅力をかきたてられるようなエネルギーを「ナモ」は持っていない。子供たちから見はなされても当然である。

③「ナモ」は，かつては全国的に広く行われた新鮮なことばであったようだが，今は，どこでも残存のありさまである。少年層が，喜々として，恥じらいもなくこれを使うことができるほどに，尾張地方の方言状況は，均質な社会ではない。

以上の三点が考えられた。





少年層者の内省による情報を付載すべきであったが省略した。

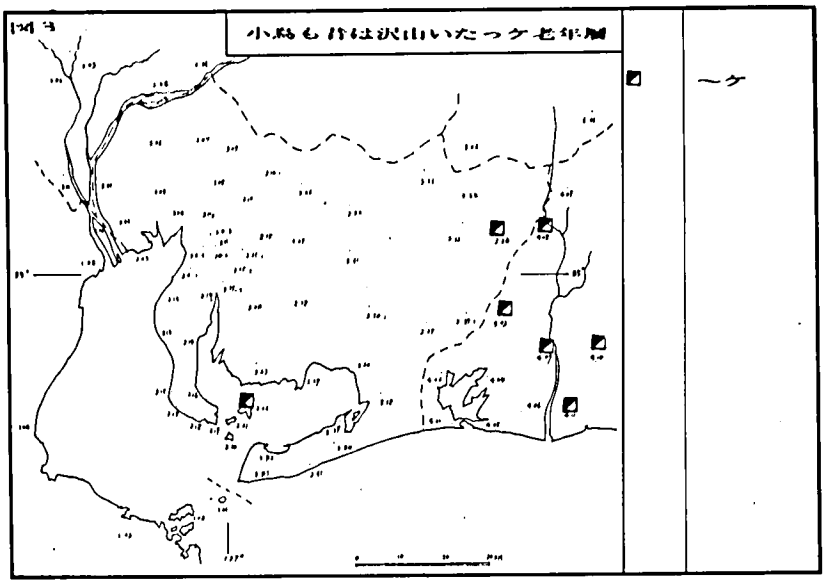
衰滅傾向の一途をたどる「～ナモ」の状況は，老年層（図１）と少年層（図２）とにより明瞭に知らされる。

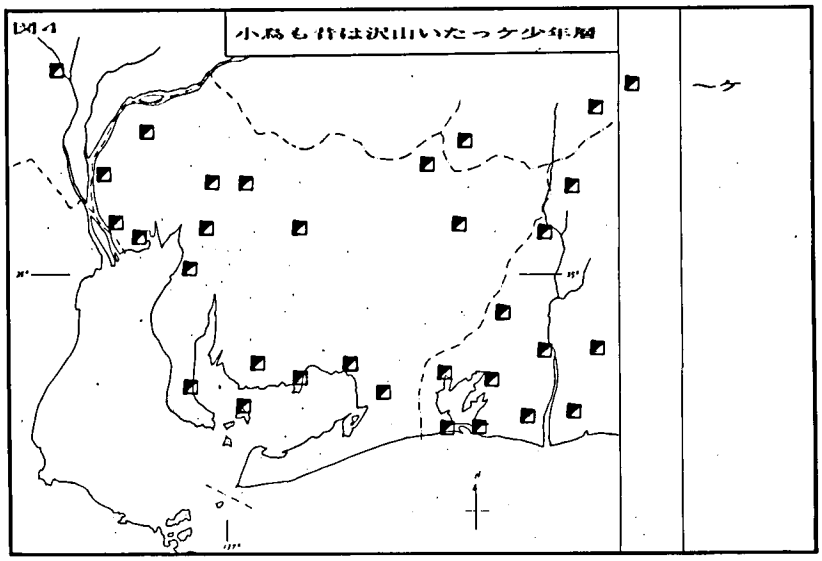
２．＜拡大型＞への展開が認められる老・少言語地図

(2)「小鳥も昔は沢山いたっケ」（老年層）・（少年層）

静岡県磐田郡水窪町では，老少年層において（「ケ」は使わないで「ツ」を言う）との教示を得た。これは，静岡県で有名な過去の助動詞「つ」であるが，その他の地点では，ケを使うか使わないかのどちらかが答えられた。

老年層（図３）では，静岡県側に分布が見られ，愛知県側には，奥三河の１地点と，三河湾内の佐久島の１地点に見られるだけである。老年層では，これ以上伝播するとは思われない。少しずつ「ケ」は西の方へと進んできていると解すべきか，あるいは，佐久島に残存した状態だと解すべきか，図３だけでは判断がつかないであろう。





ところが，図４の少年層図を見ると，「ケ」の伝播は，東→西へ動いていることが知られる。そこで，図３における佐久島の「ケ」は，必ずしも残存ではなく，むしろ，静岡県地方に盛んであったものが，いきな言い方と思われてか，観光地でもある佐久島に飛び火的に伝わったものであることが，推定できるのである。

さて，図３と図４とを比べると，「ケ」は図４の渥美半島に分布していない。また，三河地方の中央部にも分布していない。知多半島にも１地点にしか見えない。分布は尾張の平野部と三河湾沿いに著しく，また奥三河へも伝わっている。

つまり，「ケ」は，電波が放射線状にばら蒔かれるのと同じように伝わったのではなく，沿岸部や濃尾平野部へと早速に道路を通して，人間によって伝えられたものだということが分かる。

そして，この「ケ」は，少年層者にとっては，その文末の音の響きが，きわめて都会的でしかも東京のイメージをよく表しているように感じられるのであろう。丁度それは，「ええっとサー，昨日サー・・・」の「サ

ー」と同様に首都のことばへの共感が，自然にこの「ケ」をも受容させたと見てよかろう。東京語への共感が，分布の拡大を招いたようである。

3．≪変換型≫への展開が認められる老・少言語地図

(3)「鏡の［ŋ］」

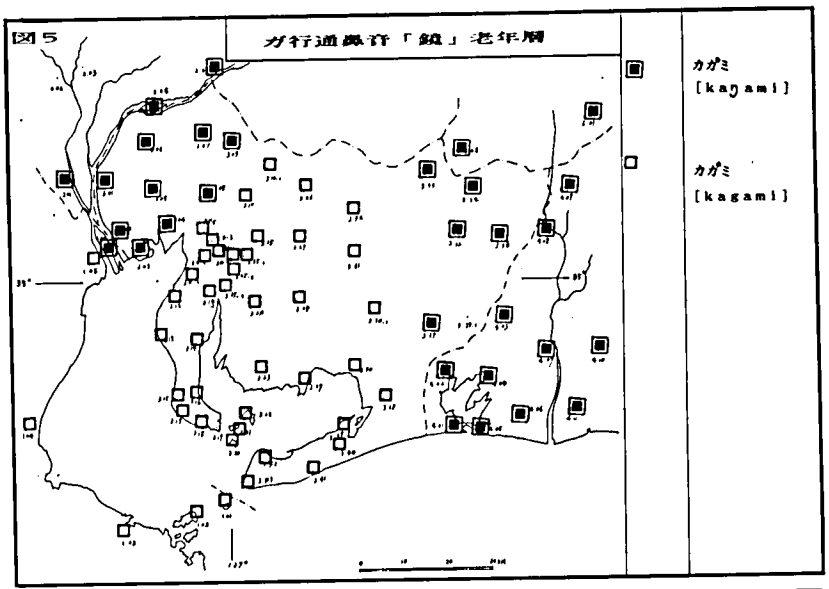
語中・語尾の通鼻音が，図5の老年層では，静岡県と奥三河とに見られる。とんで，尾張北部の名古屋を中心とした濃尾地方に，［ŋ］が見られる。したがって，知多半島と渥美半島，および岡崎市を中心にした三河地方には［ŋ］が存在しないのである。このように，はっきり分割された分布が，以前からの知識として，理解されている。

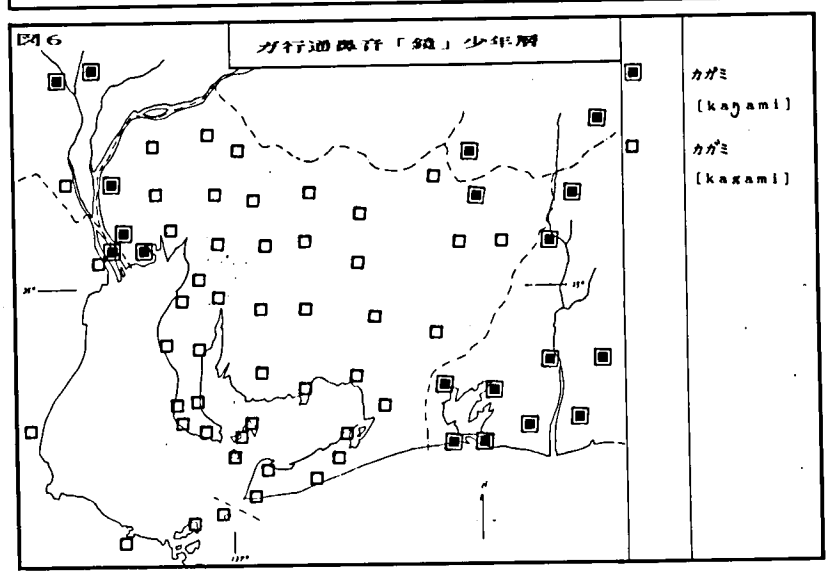
しかし，図6（少年層）を見ると，［g］がふえている。即ち，g／ŋの接触する地域で，ŋが負けて，g が勝ち残っているようである。具体的に言えば，奥三河地方や愛知県に接した静岡県地方で，g がŋにかわって座を占めている。また他方，尾張北部の名古屋地方では，極端にŋの分布が消えて，通鼻音化しない音のg へと変わってしまった。通鼻音を有するのが共通語などの特色だとすれば，それと反対の方向へ，この地方の少年層者は，ことばを変換しようとしていることになる。声高に，少年層者の標準語化が進んだ，と言われる中で，これはどう説明したら良いものであろうか。二説が考えられる。

①全国的にŋ>g への動きがある。それは，条件反射として，g とŋとの接触する地域で勝敗が決められるものと考える。破裂音のg が優勢になってきているのである。

②愛知県地方での，ŋの分布は二度の方言伝播の残存と解されないだろうか。静岡県との境にあるŋは中世以来の古いものであり，尾張名古屋地方から岐阜県にかけてのŋは，それよりも新しいものではないだろうか。ŋの言語波は，京都から東京へ向けて伝播したのであろう。しかし，今，二つの言語波は，動きを止め，愛知県にもとから存したgによって，とって替わられようとしている。

以上のいずれが正しいか





は，後の課題としたい。言語の事実として，g>gという変換傾向の指摘は，なされなければならないだろう。

(4)「曾孫」の「ヒーマゴ」

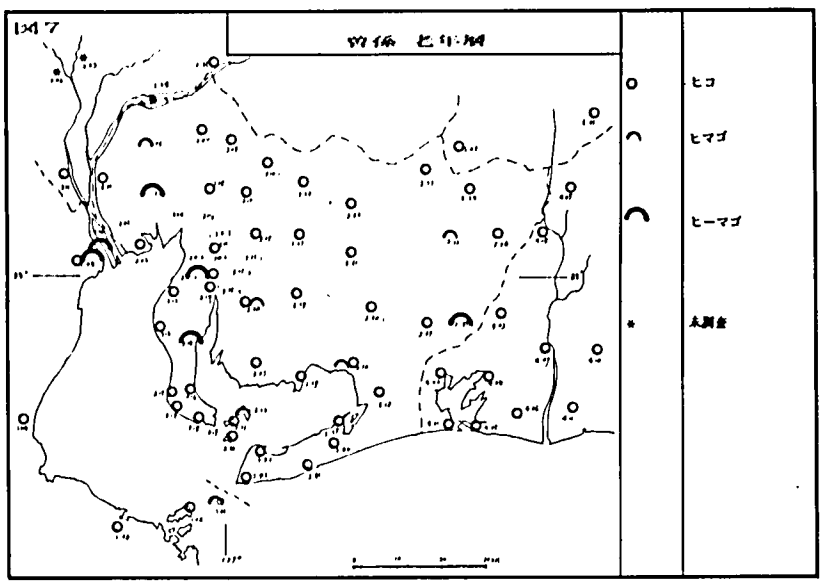
老年層図（図7）では，全域に「ヒコ」が分布している。そして，「ヒマゴ」は数地点に見られるだけである。また，「ヒーマゴ」も，6地点に，ばらばらと見られるばかりで，有意味な分布ではない。専ら，「ヒコ」の全域分布が大きな特色とされる図である。

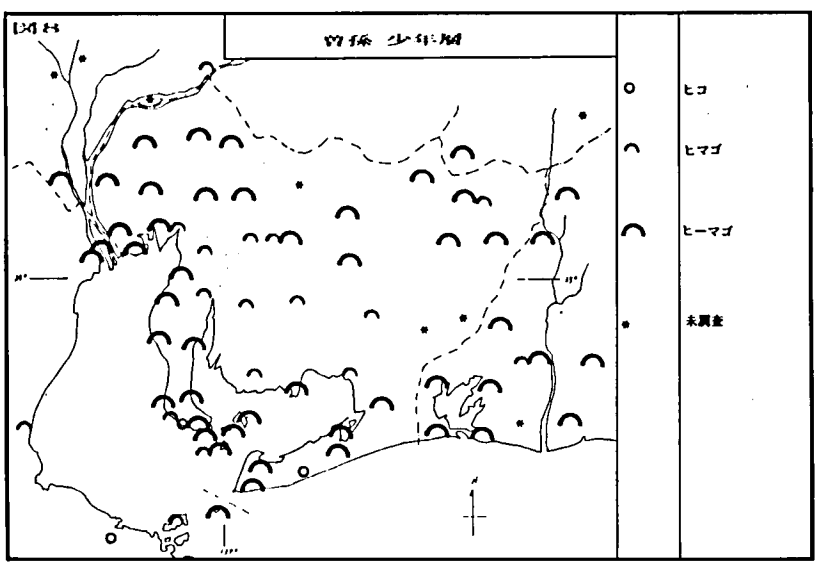
ところが，図8の少年層図を見ると，驚嘆してしまう。「ヒコ」は，三重県と渥美半島とに1地点ずつ分布しているだけで，全く，消えてしまった。その代わりに，「ヒマゴ」が全域に分布し，それよりも色濃く，「ヒーマゴ」が分布しているのである。どうしてであろうか。その理由について考えてみよう。

①「ヒコ」の方が「ヒーマゴ」よりも語形が短い。なのに，どうして，「ヒコ」を捨て，人々は「ヒーマゴ」という方を選んだのか。少年層者の選択眼は，この時代の要請であり，何らかの意味を示唆していよう。言語経済のルールからすれば，楽な「ヒコ」を維持すべきであったのに，語形の長い「ヒーマゴ」を選んだ。ここには，おそらく，別の理由があるのであろう。

②TVでの宣伝の，"親亀の上に子亀を乗せて・・・"を教示してくれたのは，恵那市での場合であった。だが，ほぼ全域に，「ヒーマゴ」が分布する点から推して，少年層者は，テレビ時代のCM-song（宣伝歌）に弱かったのであろう。図8の分布は，地を這うように，人の口から耳へと根気よく地理的な言語の道を通して伝播したものではないことを物語っている。「ヒーマゴ」は空から降ってくるように，あらゆる地域で受けとめられ，流行語として普及したようである。①よりも②の方の理由が，根拠のあるものであることが，図8の分布から明らかである。

いわば，マスコミュニケーションによって「ヒーマゴ」という語形が伝播したため，この地域に根強く存在していた「ヒコ」という語形が衰退してしまったのである。このように，全くといってよい程に，「ヒコ」→「ヒーマゴ」へと使用兼





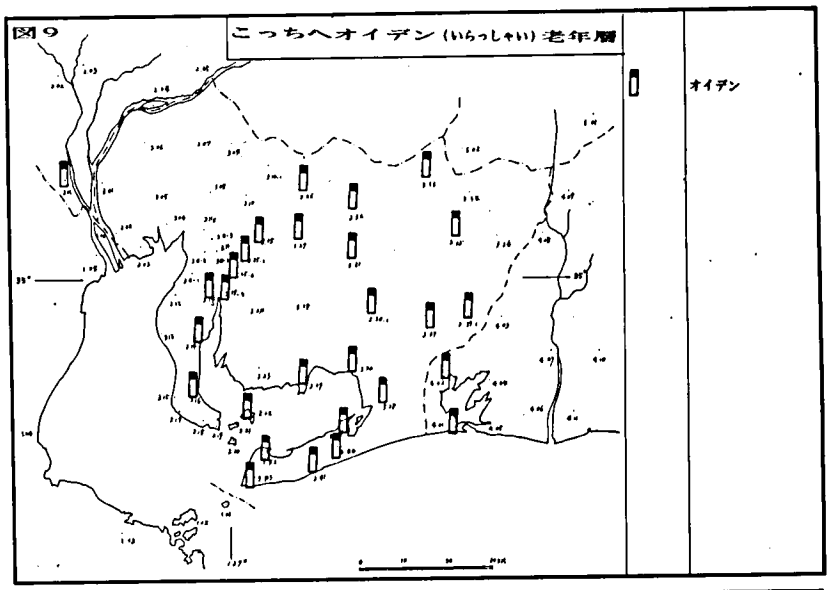
理解語形が変換する例は，珍しいと思われる。これは，それ故に，報道機関の，少年層者に与える甚大な力が示された例の一つと言えるのである。

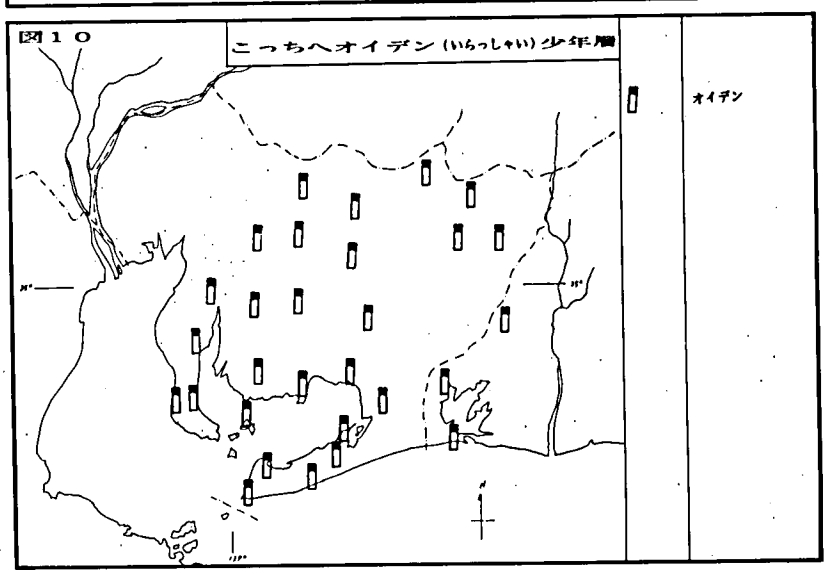
4．≪静止型≫への展開が認められる老・少言語地図

(5)「こちらへオイデン」

動詞の連用形に「ン」を付けて，軽い尊敬語が作られる。これが愛知県の三河地方に広く分布している。

図9は，「こちらへいらっしゃい」という時に，老年層で「～オイデン」を使う地域が示されている。積極的に「言う」と答えた地点が符号化されているのである。知多半島の三河湾沿いにも，「オイデン」が認められて，この言い方の優勢な力が示されているといえる。しかも，図9では，静岡県の浜名湖の周辺にも「オイデン」が分布している。三河に隣接する地域にこれが連続して見られるということで，「オイデン」の中核地は，三河の文化の中心地としての岡崎市あたりであろうと推定される。そこをぶんまわしの中心として，およそ旧三河藩領域内に，これが存するありさまである。





少年層図（図10）を見ると，「オイデン」の分布領域が，ほとんど動いていない。三河の旧藩領域内に，「オイデン」が盛んに行われているのである。

○ハヨ オイデン。早く逃げなさい。老女教示。豊橋市中世古町，1967

○イレリン。入れなさい。老女→幼男，愛知県幡豆郡吉良町津平，1968

○ヨコシン。よこしなさい。中女→幼女，愛知県渥美郡赤羽根町赤羽根，1967

ただし，このもの言いは，年上へは使用されない。同等以下への親しい間柄で使用されるものである。家庭の中や，友人同士での命令的な表現を，やや柔らかく，あたりを弱くして表したいときに，ぴったりのもの言いとされる。

言語は老年層から少年層へと若干なりとも変化する。これが言語史の原則であると考えられてきた。うつりかわるものこそことばなれ，というのが人間言語の姿であろう。しかし，図10の如く，分布は殆ど同じなのである。旧態が，年層を越えて，保持されているの

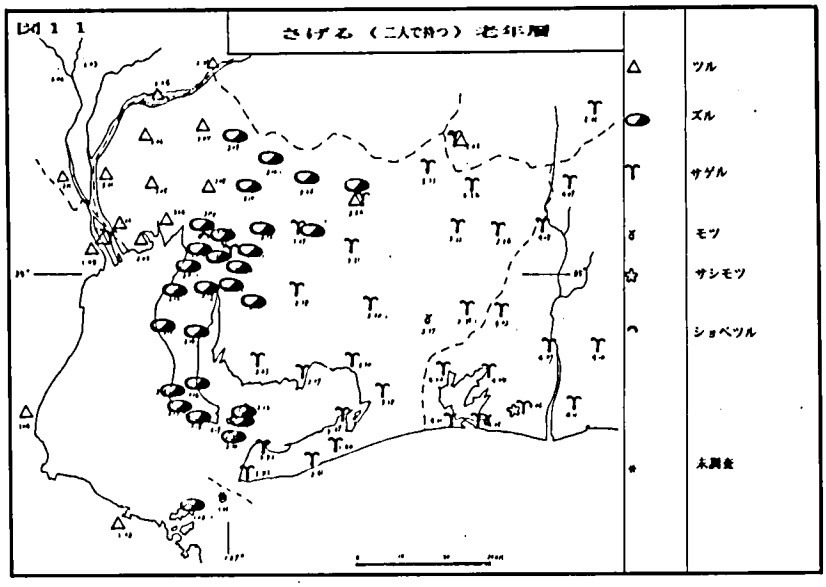
は，注目すべき言語史的事態であろう。これを，仮に静止型への展開と見ておきたいと思う。

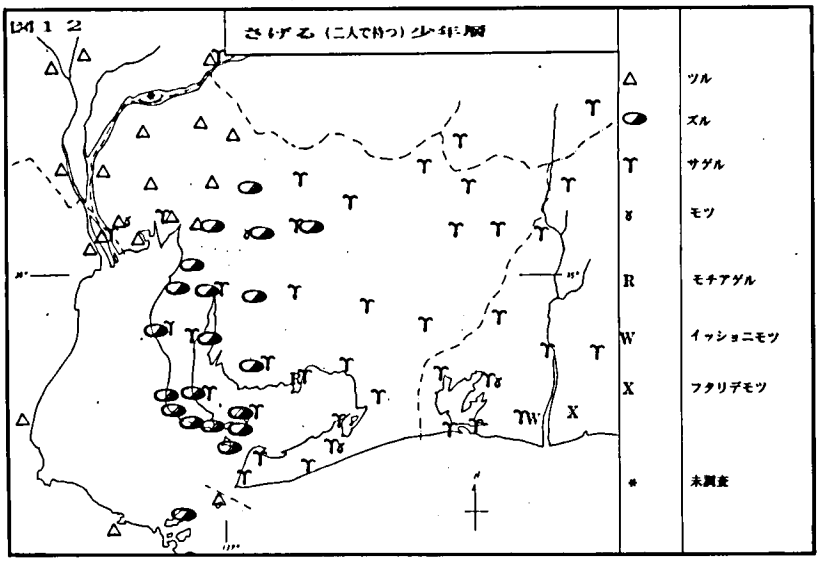
(6)「さげる（二人で持つ）」（老年層）・（少年層）

『日本言語地図』には，「風呂敷包みをショウ」「赤ん坊をオンブスル」「片方の肩で風呂敷包みをカツグ」「材木を肩にカツグ」「てんびん棒をカツグ」「二人で肩にカツグ」の6項目にも及ぶ言語地図が用意されている。しかし残念なことに，図11や図12と比較できる項目が見当たらない。愛知県地方では，二人で肩にかつぐのではなく，二人で手で持ち上げて物を移動させる動作を言い表すときに，特色のある言い方が見られるのである。この図は，当該地方の運搬動作を表す方言動詞の貴重な分布と言えるであろう。

図11「さげる（老年層）」は注目すべき図と思われるので，分布解釈を行うべき責任を感じるが，十分にはそれをし果たす用意がない。たとえば，①全く発想の異なるツル（釣る）／ズル（摩る）／サゲル（下げる）が張り合って分布する事態の謎が解けない。②ズルは，「重いから机の向こうをズッてくれない？」（持ち上げること）とか，「縁側に座ったまま，ズッて行けば落ちるよ」（引きずること）とか言われる。同音異義語であり，日常生活において，これらはよく用いられている。しかし，地理言語学の条理どおりに，反撥し合って，他方を滅ぼすということは見られないのである。さげる意味では「ズル」となり，引きずる意味では「ズル」であることなども，語の住み分けに役立っているかもしれない。同音衝突が，すぐに他を排除してしまうことにつながらない例として，この言語地図は，また，貴重である。地理言語学で同音の語が見られたとき，その語の生活場面での使い分けを考慮せずに，性急に同音衝突に結びつけることについては慎重でありたい。特に日本語方言の場合，音の高低で同音衝突を避け，区別していることがある。欧米の言語条理通りにはゆかないことも，承知しておく必要があると思う。

図11，図12では，全く，分布が総体としては同じであり，老少の間に変化のきざしが見られない。理由は不明である。これらの語に新古の観念がなく，代替しうるという思いさえ抱いて





いないようである。話者は，「ズル」が方言であるという意識さえ無いのが常である。

以上，不十分ではあるが，「さげる」の分布図の老少間に，動きが見られないことを指摘した。

※　※　※　※　※

5．展望的地理言語学のために
—老・少言語地図の対照研究法が提起することについて—

以上12枚の言語地図を用いた，老・少の言語地図の対照研究の実践によって，どのような問題が考えられるかを大まかに探ってみた。年層間の言語地図を比較することが，すなわち，新しい研究方法論として確かなものであると気付くようになった。それは，従来の言語地図が，推論や推定にとどまってしまうところを，更に展望的な推定や動向としてとらえることができると思うようになったからである。しかも，方言分布が動態ばかりでなく，静止状態のものもあることなどは，今までの言語地図の解釈の言及しがたかったところである。

今回の展望的地理言語学の実践では，

① $X \rightarrow \phi$ (disappearance)

② $X \rightarrow X^n$ (extension)

③ $X \rightarrow Y$ (alternation)

④ $X \rightarrow X'$ (maintenance)

これらの4つの進展的傾向が認められたのである。これらの方向の内部において，方言事象の歴史的動向に，それぞれの摂理を見出していくことが次の課題となるであろう。これからの課題は大きい。

おわりに

本稿で問題とした展望的地理言語学は，過去にさかのぼって言語史を再構することを目的とした地理言語学の試みに対して，過去も大事だが，現代の史的事実を直視することによって，将来に向けての言語動向を構想する地理言語学，つまり，言ってみれば展望的地理言語学が注目されてもよいであろうということを述べたものである。拙論の実践として，若干の例説を行った。十分に意を尽くせないが，ひとまず筆を擱く。

（参考文献）

① 藤原与一『瀬戸内海言語図巻　上巻』（東京大学出版会，1974年）

② 同上（『瀬戸内海言語図巻』付録説明書）瀬戸内海域方言の方言地理学的研究』（東京大学出版会，1976年）

③ 柴田武『言語地理学の方法』（筑摩書房，1969年）

④ A．メイエ著，泉井久之助訳『史的言語学における比較の方法』（みすず書房，1977年）

⑤ 小林隆「<顔>の語史」（『国語学』132，国語学会，武蔵野書院，1983年）

⑥ 服部四郎「比較方法」（『言語の系統と歴史』岩波書店，1971年）

⑦ 江端義夫「瀬戸内海域言語地図　老年層図と少年層図を見くらべて」（『方言研究年報』第14巻，広島大学方言研究会，1971年）

⑧ ヘルマン・パウル著，福本喜之助訳『言語史原理』（講談社，1965年）

⑨ E・コセリウ著，柴田武，W・グロータース共訳『言語地理学入門』（三修社，1981年）

⑩ ソシュール著，小林英夫訳『一般言語学講義』（岩波書店，1972年）

⑪ 亀井孝他編『言語史研究入門　日本語の歴史別巻』（平凡社，1966年）

⑫ 国立国語研究所『日本言語地図　I』（大蔵省印刷局，1966年）

⑬ 佐藤虎男・大阪教育大学方言研究会編『能勢地方言語地図集』（私家版，1987年）

⑭ 岡野信子・梅光女学院大学方言研究会編『山口島根両県接境地域言語地図』（私家版，1984年）

⑮ 徳川宗賢・学習院大学方言研究会編『千葉県茂原市近傍方言地図』（私家版，1984年）

⑯ 井上史雄・永瀬治郎・沢木幹栄『最上地方新方言図集』（私家版，1985年）

⑰ 小倉肇編『津軽方言地図集』（私家版，1985年）

⑱ 大島一郎・東京都教育委員会編『東京都言語地図』（私家版，1986年）

⑲ 大橋勝男『関東地方域方言事象分布地図　第一巻』（私家版，1974年）

⑳ 佐藤亮一・江端義夫「天竜川・大井川流域の言語分布」（『日本の沿岸文化』，古今書院，1989年）

㉑ 井上史雄『東京・神奈川言語地図』（私家版，1988年）